

戦後の日本における曹操のイメージ形成とその変遷

原田 奈都美

中国・三国時代の人物である曹操は悪役というイメージが定着していたが、中国では再評価が行われた。日本では三国志をテーマとする作品が、漫画やゲームなど様々な媒体で登場し、曹操のイメージが多様化していると考えられるが、イメージを比較する研究はなかった。そこで曹操はどのような人物として描かれ、イメージが形成されていたのかを確認し、戦後の様々な三国志作品の登場で曹操のイメージに変化があるのか調査した。

まずは正史の武帝紀本文と裴松之の付けた注で、曹操に使われた形容詞・形容動詞を抜き出し、曹操がどのように史書で伝えられているのかを確認した。すると正史本文では厳格な人物というイメージを表す言葉が多く使用されてはいたが、悪役とは捉え難かった。しかし注では悪いイメージを表すものが使われていた。同様の作業を『三国志演義』でも行うと、悪いイメージを表すものが多くなった。正史は曹魏正統論を採っているが、『三国志演義』は蜀漢正統論を採っているため、徐々に曹操に対する風当たりが厳しくなり、悪役というイメージ形成に繋がったと考えられる。

次に、日本での曹操のイメージを知るために国内で普及していた三国志を調べた。すると明治時代には『通俗三国志』が、20世紀に入ってから『三国志演義』の毛宗崗本という版本を翻訳したものやダイジェスト版が多かった。『通俗三国志』は李卓吾本という『三国志演義』の版本を翻訳したものである。李卓吾本を底本として修正を加えたものが毛宗崗本であり、毛宗崗本の方が曹操に厳しいことが各回のタイトル比較より判明した。これにより戦前の日本でも曹操が悪役としてのイメージを確立していたことが確認できた。

そして曹操のイメージの変遷を調査するにあたり、三国志ファンの運営するファンサイト・ファンブログ 50 件を調査し、知名度の高い三国志作品を 10 点選んだ。その中から調査対象を年代毎に選び、70 年代を横山光輝『三国志』、80 年代を人形劇三国志、90 年代を蒼天航路と北方謙三『三国志』と真・三國無双シリーズ、2000 年代をレッドクリフとした。それぞれの作品に対し、呂伯奢一家殺害事件と徐州での虐殺という 2 つの話の描き方の確認と、先述の形容詞・形容動詞チェックを行った。その結果、年代による特定の傾向は見られなかった。また曹操を悪役としている『三国志演義』沿いの作品で必ずしも曹操を悪役として描いているわけではなかった。しかし映像作品では曹操を悪役として描いていた。これは時間的制約の中で分かりやすい話を作ろうとすると勸善懲惡の色が強くなることが原因と考えられる。映像作品は三国志に興味のない人にも接しやすい媒体であるため、映像作品しか知らない人は曹操に悪いイメージを抱くと考えられる。三国志への理解度や接した作品によって、読者の曹操のイメージは様々になると考えられる。

(指導教員 松本浩一)